アッシリア帝国におけるエジプト人研究の現状と課題　―都市アッシュルのエジプト人アーカイブに注目して―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丸小野 壮太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002934

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

ヘレニズム〜イスラーム考古学研究　2024,　21-30.

アッシリア帝国におけるエジプト人研究の現状と課題
—都市アッシュルのエジプト人アーカイブに注目して—[1]
Current Status and Challenges on the Egyptians in the Neo Assyrian Empire
—Focus on the Archive of the Egyptians in city of Assur—

丸小野壮太 (常磐大学高等学校)
Sota Maruono

1. はじめに

本稿では、アッシリア帝国[2]におけるエジプト人[3]について、特に都市アッシュルから数多く発見されているエジプト人アーカイブ[4]に注目しながら、研究の現状と課題を整理することが目的である。

次に、本稿の構成は以下の通りである。本節 (第 1 節) では本稿の目的を示した。第 2 節ではアッシリア帝国におけるエジプト人研究について先行研究整理を通してその現状と課題を明らかにする。第 3 節では第 2 節で論点となる都市アッシュルのエジプト人アーカイブについて基礎情報から最新の研究動向までをまとめ、新たな研究課題を問題提起する。第 4 節では本稿のまとめと今後の課題を示す。

2. 先行研究整理

本節ではアッシリア帝国におけるエジプト人研究に関する先行研究を整理する[5]。ここで、本稿では 1970 年代から 2024 年までの先行研究を対象とする。具体的には先行研究を (1)1970 年代—2000 年、(2)2000 年—2010 年代前半、(3)2010 年代後半—2024 年のように年代順に整理し、(4) 現状と課題についてまとめる。

(1)1970 年代—2000 年

はじめに、1970 年代では Spalinger, A. (1974a) と Spalinger, A. (1974b) がアッシリア学の視点にエジプト学の視点も踏まえ、アッシリア王エサルハドン / アッシュルバニパルとエジプトとの関係についてアッシリア王碑文を用いて、実証的に明らかにした[6]。同時に、アッシリア帝国領域内のエジプト人についての存在も指摘した[7]。

その後、1980-1990 年代では Onasch, H.-U. (1994) がアッシリア学の視点から主に網羅的なアッシリア学史料と一部のエジプト学史料を収集し、解釈を通して、アッシリア帝国のエジプト遠征を体系的に明らかにした。そこでもアッシリア帝国領域内のエジプト人について紹介されている[8]。

関連して、1980 年代では Pedersén, O. (1986) が都市アッシュルにおける楔形文字文書アーカイブを作成するとともに、都市アッシュルにおけるエジプト人の楔形文字文書アーカイブ“N31”を 61 点設定した[9]。また、Pedersén, O. and Troy, L. (1993) が都市ニネヴェにおけるエジプト人について簡潔に紹介をした。さらに、1990 年代後半では PNA = K. Radner and H.D. Baker (eds.) The Prosopography of the Neo-Assyrian Empire, I/1– III/2, Helsinki 1998-2011 プロジェクト (以下、PNA) が開始された。PNA は新アッシリア帝国の人名事典 (全 6 巻) であり、アッシリア帝国において多くのエジプト人の名前が検証されていることを強調している[10]。

以上より、1970 年代—2000 年の先行研究はアッシリア学者 Spalinger, A. や Onasch, H.-U. を中心に進められた。同時に、Pedersén, O. によって、アッシリア帝国におけるエジプト人に関する楔形文字文書アーカイブ“N31”が定義づけられた。

(2)2000 年—2010 年代前半

2000 年代に入り、楔形文字文書史料集 Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) が出版された。Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) はイスタンブール考古学博物館が所蔵する新アッシリア時代の楔形文字文書を校訂した史料集である。その中で Pedersén, O. (1986) が“N31”と分類した都市アッシュルにおけるエジプト人についての楔形文字文書 70 点が校訂された[11]。さらに、楔形文字文書史料集 Faist, B. (2007) が出版された。Faist, B. (2007) はペルガモン博物館が所蔵する新アッシリ

ア時代、特に都市アッシュルの楔形文字文書を校訂した史料集である。その中で Pedersén, O. (1986) が“N31”と分類した都市アッシュルにおけるエジプト人についての楔形文字文書 25 点が校訂された [12]。

次に、Radner, K. の先行研究を論じる。Radner, K. (2008) は Onasch, H.-U. (1994) を再考し、エサルハドンのエジプト遠征 (前 671 年) のイスラエルからエジプトへの遠征ルートの新たな提案を行った。続き、Radner, K. (2009) はアッシリア帝国王宮に属するエジプト人学者ら、Radner, K. (2012) はアッシリア帝国におけるエジプト人王室の人質らを対象とし、詳細な分析を行った。結果、アッシリア帝国におけるエジプト人の実態の一端が明らかになった [13]。しかし、Radner, K. (2009) と Radner, K. (2012) はとりわけ、エジプト人学者とエジプト人王室の人質が主な分析対象であり、アッシリア帝国におけるエジプト人の全ての実態が明らかになったとは言えない [14]。

また、考古学の視点から Onasch, H.-U. (2010) はペルガモン博物館に所蔵される都市アッシュルで発掘されたアラバスター土器を対象に、それらはエジプト産であると評価した。

以上より、2000 年―2010 年代前半の先行研究は楔形文字文書史料集 Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) と Faist, B. (2007) の出版により都市アッシュルおけるエジプト人に関する楔形文字文書の校訂が進められた。また、アッシリア学者 Radner, K. の一連の研究によりアッシリア帝国におけるエジプト人の実態の一面が明らかになった [15]。

(3)2010 年代後半―2024 年

2010 年代後半―2024 年は① Karlsson, M. の先行研究、② Wasmuth, M. S. の先行研究、③ Hoff, J. van’t. の先行研究、④新史料の可能性の順番に論じる。

① Karlsson, M. の先行研究

2010 年代後半―2024 年、アッシリア学者 Karlsson, M. は数多くのアッシリア帝国におけるエジプト人研究に関連する先行研究を出版している。紙面の都合上、本稿では以下 6 点の先行研究［Karlsson, M.(2018)、Karlsson, M.(2021)、Karlsson, M.(2022a)、Karlsson, M.(2022b)、Karlsson, M.(2023)、Karlsson, M.(2024)］に特化して論じる。

第一に、Karlsson, M. (2018) は新アッシリア王室書簡文書におけるエジプトとクシュへの言及を網羅的に集めた結果、2 つのカテゴリー①敵対対象としてのエジプトとクシュと②生物または無生物の富としてのエジプトとクシュで特定されると主張している [16]。

第二に、Karlsson, M.(2021) は Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) に含まれる都市アッシュルにおけるエジプト人に関する楔形文字文書 StAT 2 173-174 の主題を巡って考察し、アッシリア帝国内でのエジプト人の法的権利を主張している [17]。

第三に、Karlsson, M.(2022a) は Miglus, P. , Radner, K. and Stepniowski, F. M. (eds.) (2016) に含まれる都市アッシュルにおけるエジプト人に関する楔形文字文書を根拠に、エジプト人女性が自ら経済的な取り引きを行い、法的・経済的に自由を享受していたことを明らかにした [18]。

第四に、Karlsson, M.(2022b) はアッシリア帝国内の史料におけるエジプト人名を網羅的に収集したプロソポグラフィ研究である [19]。

第五に、Karlsson, M.(2023) はアッシリア帝国におけるエジプト人人名、特にエジプト語とアッカド語のハイブリッド形式の人名を考察した研究である [20]。

第六に、Karlsson, M.(2024) はアッシリアではなくバビロニアが研究対象である。具体的には、新アッシリア時代に続く新バビロニア時代・アケメネス朝ペルシア時代におけるエジプト人名を網羅的に収集した研究である。

② Wasmuth, M. S. の先行研究

2010 年代後半―2024 年、エジプト考古学者 Wasmuth, M. S. もアッシリア帝国におけるエジプト人研究に積極的に取り組んでいる [21]。紙面の都合上、本稿では以下 4 点［Wasmuth, M. S. (2016)、Wasmuth, M. S. (2021)、Wasmuth, M. S. (2022)、Lindén, K. et al. (2024)］に特化して論じる。

第一に、Wasmuth, M. S. (2016) は Draper, C. (2015) と同様の史料を用いて「交差―地域―移動性」に注目し、同史料の詳細な分析を通して古代東地中海世界の人々の移動を明らかにした。同時に、古代東地中海世界「交差―地域―移動性」研究の際に、アッシリア帝国におけるエジプト人を含め、「外国人」を考察することの意義を主張した [22]。

第二に、Wasmuth, M.S. (2021) は考古学の視点から都市アッシュルにおけるエジプト人アーカイブ“N31”について考察した先行研究である[23]。

第三に、Wasmuth, M.S. (2022) は Karlsson, M. (2021) と同様の史料 StAT 2 173-174 について「家の中の見知らぬ人」に注目して考察した先行研究である[24]。

第四に、Lindén, K. et al. (2024) は Wasmuth, M. S. も共著者の一人である「デジタル・アッシリア学」に関する先行研究である。「デジタル・アッシリア学」(人文情報学) の一事例として都市アッシュルにおけるエジプト人に関する言及も見られる[25]。

③ Hoff, J. van’ t. の先行研究

Hoff, J. van’ t. (2021) はライデン大学に提出されたアッシリア学・エジプト学の修士論文であり、新アッシリア時代のエジプト人の社会的な位置づけに関する総合的な研究として位置付けられる。

④新史料の可能性

2010 年代後半―2024 年、新史料の発見もあった。具体的には、イラク国立博物館が所蔵する新アッシリア時代：都市アッシュルの楔形文字文書を校訂した考古学発掘調査報告書・史料集 Miglus, P. , Radner, K. and Stepniowski, F. M. (eds.) (2016) が出版された。その中で Pedersén, O. (1986) が“N31”と分類した都市アッシュルにおけるエジプト人についての情報を含む楔形文字文書文書 15 点が校訂された[26]。

以上より、2010 年代後半―2024 年の先行研究は Karlsson, M. や Wasmuth, M. S を中心に進められ、Hoff, J. van’ t. のような総合的な研究も出版された。同時に考古学発掘調査報告書・史料集 Miglus, P. , Radner, K. and Stepniowski, F. M. (eds.) (2016) の出版により都市アッシュルにおけるエジプト人に関する新たな史料校訂が行われた[27]。

(4) 現状と課題

これまでの先行研究ではアッシリア帝国におけるエジプト人は帝国の中心的な都市で生活していたことが明らかになった[28]。特に先行研究ではアッシリア帝国におけるエジプト人について、特定のエジプト人に関する研究[29]、また、アッシリア帝国におけるプロパガンダ研究[30]や古代東地中海世界における人々の移動「交差―地域―移動性」研究[31]に付随する形で明らかになりつつある。しかしながら、網羅的な史料を集めた包括的な研究は存在しない。そこで、丸小野壮太 (2020) は既に校訂されているにもかかわらず、これまで詳細な分析を行った先行研究がないが、数多くの史料が残る都市アッシュルにおけるエジプト人を研究対象にし、アッシリア帝国の社会の中でのエジプト人がどのような権利･義務を持ち、どのような活動を行い、どのような社会的な役割を果たしたかを明らかにした[32]。

2021 年以降、Karlsson, M. と Wasmuth, M. S. を筆頭に数多くの先行研究が出版され、アッシリア帝国におけるエジプト人の社会的位置づけを明らかにした Hoff, J. van’ t. の修士論文も提出された。2024 年現在、アッシリア帝国におけるエジプト人研究は新たな地平が開かれた段階をむかえている。一方、都市アッシュルのエジプト人アーカイブの詳細な分析は今後の課題である。

3. 都市アッシュルのエジプト人アーカイブ

本節では前述の先行研究整理でも詳細な分析が今後の課題とされる都市アッシュルのエジプト人アーカイブについて (1) 基礎情報［①定義②文書製作年代③法的文書としてのジャンル］、(2) 先行研究での解釈、(3) アッシリア帝国研究における位置づけの順に論じる[33]。

(1) 都市アッシュルのエジプト人アーカイブの基礎情報

①定義

はじめに、都市アッシュルのエジプト人アーカイブは Pedersén, O. (1986) が設定した“N31”という楔形文字文書アーカイブで知られている[34]。本稿では以下の表：Ⅰ , Ⅱ , Ⅲ , Ⅳ , Ⅴに属する楔形文字文書“N31”と“N52B”[35]の計 112 点を都市アッシュルにおけるエジプト人アーカイブと設定する[36]。なお、考古学の視点からは Wasmuth, M. (2021) を参照されたい。

②文書製作年代

次に、都市アッシュルのエジプト人アーカイブの文書製作年代は前 675 年～前 612 年である。特に多くの文書作成年代が前 660 年～前 612 年に位置づけられ

表：都市アッシュルのエジプト人アーカイブ一覧

本稿の番号	所蔵先の博物館	数	史料集
Ⅰ (“N31”)	イスタンブール考古学博物館	70 点	Donbaz, V. and Parpola, S. (2001)
Ⅱ (“N31”)	ペルガモン博物館	25 点	Faist, B. (2007)
Ⅲ (“N31”)	デンマーク国立博物館	1 点	Jacobsen, Th. (1939)
Ⅳ (“N31”)	大英博物館 [37]	1 点	Fales, F.M. (1983)
Ⅴ (“N52B”)	イラク国立博物館	15 点	Radner, K. (2016)

る。この根拠は多くの都市アッシュルにおけるエジプト人がアッシリア帝国のエジプト遠征 (前 671 年・前 668/667 年・前 664/663 年) 後の強制移住政策 [38] に伴い、エジプトからアッシリアへ移住したことが考えられる [39]。そして、文書作成年代や多く登場する「Lā-turam-manni-Aššur 一族 [40]」から都市アッシュルにおけるエジプト人は少なくとも 3 世代確認できる [41]。

③法的文書としてのジャンル

都市アッシュルのエジプト人アーカイブに属する楔形文字文書は新アッシリア時代の典型的な法的文書 [42] の書式に分類され、以下のように様々なジャンルの楔形文字文書から構成される。(a) 婚姻文書:計 3 点、(b) 離婚文書：計 1 点、(c) 裁判判決文書：計 13 点、(d) 銀の貸し付け文書:計 45 点、(e) 銀の貸し付けリスト:計 2 点、(f) 魚の貸し付け文書：計 2 点、(g) 大麦の貸し付け文書：計 4 点、(h) 小麦の貸し付け文書：計 1 点、(i) 家屋の売買契約証書：計 3 点、(j) 相続分割文書：計 2 点、(k) 馬の管理義務文書［*iškāru*］：計 4 点、(l)［iškāru］に関する領収書:計 1 点、(m) 債権文書［財産権］：計 2 点、(n) 債権の 支払い文書［財産権］：計 1 点、(o) 女中の購入文書：計 5 点、(p) 女性の購入文書：計 4 点、(q) 奴隷の購入文書：計 1 点、(r) 人々の購入文書：計 1 点、(s) 賃金の支払い文書：計 5 点、(t) 寄進の義務に関する文書：計 1 点、(u) ワインと家庭用品の在庫一覧文書:計 1 点、(v) ジャンル不明の文書:計 10 点。

(2) 先行研究における都市アッシュルのエジプト人アーカイブに関する解釈

ここでは、都市アッシュルのエジプト人アーカイブについて解釈を行った計 10 名の先行研究に関して各論文における主題と副題としての取り扱いを分類基準として整理する。なお、都市アッシュルのエジプト人アーカイブについて主題として扱った先行研究は計 4 点：Karlsson, M. の一連の研究、Wasmuth, M.S. の一連の研究、Draper, C. (2014)、Hoff, J. van’t. (2021) であり、副題として扱った先行研究は計 6 点:Fales, F.M. (2007)、Ponchia, S. (2012)、Svärd, S. (2018)、Faist, B. (2019)、Baderschneider, S. (2021)、菊池咲 (2022) である。

①主題としての先行研究

前述の通り、Karlsson, M. の一連の研究はアッシリア学・統計学の視点から具体的な楔形文字文書 StAT 2 173-174、エジプト人女性、エジプト人人名の分析をまとめている [43]。

前述の通り、Wasmuth, M.S. の一連の研究はエジプト学・考古学の視点から具体的な楔形文字文書 StAT 2 173-174、アーカイブの特徴、エジプト人の活動の分析をまとめている [44]。

前述の通り、Draper, C. (2014) はアッシリア学の視点から都市アッシュルのエジプト人アーカイブを初の分析対象としたアッシリア帝国におけるエジプト人ディアスポラに関する修士論文である [45]。

前述の通り、Hoff, J. van’t. (2021) はアッシリア学の視点から都市アッシュルのエジプト人アーカイブを初の人文情報学の分析も行った新アッシリア時代のエジプト人の社会的な位置づけに関する修士論文である [46]。

②副題としての先行研究

Fales, F.M. (2007) はアッシリア帝国の多言語主義について都市アッシュルのエジプト人アーカイブから読み取れるエジプト人名におけるエジプト語の保持を一つの根拠として論じている [47]。

Ponchia, S. (2012) はアッシリア帝国の行政システムについて行政システムに含まれていた新アッシリア時代の典型的な法的文書としての都市アッシュルのエジプト人アーカイブを一事例として論じている [48]。

Svärd, S. (2018) はジェンダー史の視点から新アッシ

リア時代の神殿における女性について都市アッシュルのエジプト人アーカイブ StAT 2 164, 184(婚姻文書) を一事例として論じている [49]。

Faist, B. (2019) は新アッシリア時代の法的文書の特質について都市アッシュルのエジプト人アーカイブの可能性と限界性にも注目しながら論じている [50]。

Baderschneider, S. (2021) は宗教学の視点からアッシュル神殿とその専門家に関する博士論文であり、専門家としての職業に注目した都市アッシュルのエジプト人アーカイブについての分析も行われている [51]。

菊池咲 (2022) は暦注研究の視点から都市アッシュルのエジプト人アーカイブに属する裁判文書を裁判の日取りに注目して分析することを通してエジプト人、特にエジプト人女性が法的独自性を保った活動をしていたと考察している [52]。

(3) アッシリア帝国研究における都市アッシュルのエジプト人アーカイブの位置づけ

上記の計 10 名の先行研究が出版されているように、近年、アッシリア帝国におけるエジプト人研究の大きな進展が見られる。ここでは、アッシリア帝国研究における都市アッシュルのエジプト人アーカイブの位置づけを検討する。

現在、アッシリア帝国研究では多岐にわたる研究テーマが見られる [53]。これは多種多様なジャンルの楔形文字文書が現存しているからである。アッシリア帝国研究の最新の研究成果がまとめられている山田重郎 (2024) は「特に前 8 世紀半ばから王国滅亡 (前 612 年) 前のアッシュルバニパルの治世までのアッシリア帝国の絶頂期は長文のものを含めて何千点という王碑文が見つかっているうえ、約 3000 点の書簡、数千点の行政文書と契約文書、勅令、歴史卜占、予言、二万点あまりの図書館文書という大量の史料に恵まれ、政治、社会、文化の詳細についてよく知られている。」のように論じている [54]。その中で、都市アッシュルのエジプト人アーカイブが対象になるのは「数千点の行政文書と契約文書」を主に扱う社会史研究である [55]。また、アッシリア帝国研究の潮流としてアイデンティティ研究があげられる [56]。現存する楔形文字文書からアッシリア帝国内に数多くのエジプト人がいたことが明らかになっており、アイデンティティ研究にも貢献できることは間違いない [57]。ゆえに、都市アッシュルのエジプト人アーカイブは注目されるべき史料であり、アッシリア帝国におけるエジプト人研究は新たな地平が開かれた段階である。

4. おわりに

これまで、本稿では、アッシリア帝国におけるエジプト人について、特に都市アッシュルのエジプト人アーカイブに注目しながら、研究の現状と課題を整理してきた。ここで、都市アッシュルのエジプト人アーカイブから考えるアッシリア帝国におけるエジプト人研究の新たな研究課題を問題提起する。第一に、都市アッシュルのエジプト人アーカイブ [58] の文献学的に丁寧な読み直しである。具体的には、前述したように、都市アッシュルのエジプト人アーカイブに関する先行研究は複数出版されているが、多くは別のテーマに付随する形 (副題) での分析に留まる。主題として都市アッシュルのエジプト人アーカイブを扱う Karlsson, M. は人名分析と統計的な分析、Wasmuth, M.S. は考古学的な分析に留まっている。よって、文献学的な分析は今後の課題であろう。第二に、人文情報学研究 [59] である。具体的には Hoff, J. van’t. (2021) は都市アッシュルのエジプト人アーカイブに関する人文情報学の分析も行っているが、①エジプト人アーカイブに現れる人間関係を可視化することと②エジプト人アーカイブの特徴を分析することという 2 つの課題が残っている。よって、アッシリア学と人文情報学の両視点からエジプト人コミュニティの特徴とエジプト人アイデンティティを分析することが今後の課題である。第三に、都市アッシュルのエジプト人アーカイブに見られる「王のアデー [60]」(*adê ša šarri*[61]) の研究である。具体的には、「王のアデー」は都市アッシュルのエジプト人にとってどのような意味があったのか明らかになってはいなく、今後の課題である。最後に、2024 年度以降、筆者は上記の計 3 点 (今後の課題) を中心に都市アッシュルのエジプト人アーカイブを用いたアッシリア帝国におけるエジプト人研究を進める。

註

1　本稿は科学研究費・奨励研究 (課題番号 24H02438) の研究課題「歴史教育における開かれた古代地中海世界史研究―「歴史総合」「世界史探究」授業開発」の研究成果の一部である。具体的には 2024 年 7 月 14 日 (日) に金沢大学角間キャンパ

スで開催された第 30 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会における研究発表「アッシリア帝国におけるエジプト人から考える開かれた古代地中海世界史研究」と 2024 年 8 月 22 日 (木) にオンラインで開催された第 9 回楔形文字文書研究会における研究発表「都市アッシュルにおけるエジプト人アーカイブ研究の現状と課題」の一部を原稿にしたものである。研究発表当日にコメント・質問をしてくださった方々には感謝申し上げる。本稿の研究背景となっている開かれた古代地中海世界史研究については佐藤育子・丸小野壮太 (2024) を参照されたい。なお、都市アッシュルにおけるエジプト人アーカイブについての最新情報をご教授いただいたヘルシンキ大学の Melanie Wasmuth 氏には感謝申し上げる。

2　アッシリア帝国に関しては山田重郎 (2024) を参照されたい。山田重郎 (2024) はアッシリア帝国が本稿の研究対象であるエジプト人など多様な出自を持つ人々を内包した「人類最古の帝国」であると主張し、筆者も大いに賛同している。同様の主張は Karlsson, M. (2019) を参照されたい。

3　本稿における「エジプト人：*Muṣurāya*：^{lú}*mu-ṣur-a-a*, ^{lú}*mu-ṣur-ra-a-a*, ^{lú}*mu-ṣu-ra-a-a* / *Muṣrāya*：^{lú}*mu-uṣ-ra-a-a* / *Miṣirāya*：^{lú}*mi-ṣir-ra-a-a*」(これらはアッカド語で「エジプト人」を表す代表的な翻字と転写である) について定義する。本稿では「エジプト人」を史料上における①「エジプト人」と記載されている。②「エジプト人」の特定の職業が記載されている。例えば、「*ḫarṭibu*」(エジプト人夢占い師) や「*ṭupšar Muṣurāya*」(エジプト人書記) は「エジプト人」の特定の職業である。③人名の語源が古代エジプト語である。以上① - ③の計 3 点のいずれかまたは複数の基準によって定義する

4　本稿の第 3 節において詳述する。

5　本節は丸小野壮太 (2020)pp.5-9.［先行研究整理］を大幅に加筆修正したものである。なお、2021 年、アッシリア学者 Karlsson, M. による文献一覧“A Bibliography of Studies on Egyptian-Mesopotamian Relations (4th ed.)”は大変参考になる。https://www.diva-portal.org/smash/record.jsf?pid=diva2%3A1161099&dswid=3344 (最終閲覧 2024 年 11 月 9 日)　ここで、本稿末尾の【主な参考文献】では上記の文献一覧には含まれない 2021 年以降に出版された数多くの先行研究も一覧にした。

6　最新の先行研究 Sano, K. (2016) では関連するエサルハドン碑文 4 点とアッシュルバニパル碑文 5 点、計 9 点を用いて、エサルハドンがエジプト在地の王たちを「王の総督」と任命したことを根拠に、アッシリア帝国のエジプト支配が従来の中央集権的な直接統治ではなく、在地王を属国王に任命した間接統治であったことを明らかにした。

7　Spalinger, A. (1974b) p.325. Spalinger, A. (1974b) はアッシリア王エサルハドン / アッシュルバニパルがエジプト (メンフィス・テーベなど) からアッシリア帝国 (ニネヴェ・アッシュル・カルフなど) に在地王や専門職など高位のエジプト人を連行し、帝国領域内で彼らを尊敬していたと論じた。

8　Onasch, H.-U. (1994) pp.13-16.

9　“N31”に関しては Pedersén, O. (1986) pp.125-129. を参照。

10　PNA Ⅰ /1, p.xl. (Radner, K.) 特に前 7 世紀の都市アッシュルからの史料である。以下引用である。“Numerous languages are represented in the Neo-Assyrian onomastic material. While the majority of the names are Akkadian (Assyrian and Babylonian), names from other Semitic languages represent another large part of the onomasticon: the Northwest Semitic names, i.e. Aramaic, Phoenician, Moabite and Hebrew, dominate but there are also a number of Arabic names. Surprisingly, many Egyptian names are attested in Assyria proper, especially in the 7th century material from Assur.”

11　Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) p.XVI. 都市アッシュルにおけるエジプト人は古代エジプト語とアッカド語などの名前を持ち、少なくても 63 名を確認できる。

12　Faist, B. (2007) pp.125-149.

13　Radner, K. の指導のもとで執筆された先行研究 Zamazalová, S. (2011) と Zamazalová, S. (2015) を参照されたい。

14　アッシリア社会が主題の Radner, K. (2017) ではその他エジプト人の言及も見られる。

15　他にも先行研究として Draper, C. (2014) はアッシリア帝国におけるエジプト人ディアスポラに関する修士論文であり注目に値する。また、Draper, C. (2015) はアッシリア学とエジプト学の両視点から都市アッシュルで発掘された 1 点の売買文書 (前 7 世紀) に登場するエジプト人 2 名の名前を詳細に分析し、このエジプト人 2 名はアッシリア帝国の強制移住政策により、サマリアからグザナに連行されたと主張した。これら先行研究以前にも Huber, I. (2006) は各職業に注目することでエジプト人の細分化を行った。

16　Karlsson, M. (2018) pp.57-58.

17　Karlsson, M. (2021) p.207.

18　Karlsson, M. (2022a) pp.189-190.

19　本書の書評は Radner, K. (2023) pp.175-177. を参照されたい。

20　Karlsson, M. (2023) pp.149-150.

21　現在、Melanie Wasmuth 氏は研究課題“Cross-regional Migration in the Ancient World：Egyptians In Assur”を進めている。https://researchportal.helsinki.fi/en/projects/cross-regional-migration-in-the-ancient-world-egyptians-in-assur (最終閲覧 2024 年 11 月 9 日)

22　Wasmuth, M. S. (2016) p.98.

23　Wasmuth, M.S. (2021) pp.31-79. その他、Höflmayer, F. (2021) も考古学の視点からの先行研究である。

24　Wasmuth, M.S. (2022) pp.139-183.

25　Lindén, K. et al. (2024) pp.927-929.

26　Miglus, P. , Radner, K. and Stepniowski, F. M. (eds.) (2016) pp.121-126. なお、楔形文字文書校訂者は Radner, K. である。

27　最新のアッシュル発掘調査 (2023 年度) 報告書 Radner, K. and Squitieri, A. (eds.) (2024) ではエジプト人に関連する楔形文字文書と遺物などの言及は見られない。以下はアッシュル発

掘調査についての最新情報がまとめられているウエブサイトである。https://www.en.ag.geschichte.uni-muenchen.de/staff/staff/squitieri/research/assur1/index.html (最終閲覧 2024 年 11 月 11 日)

28 例えば、Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) p.XVI. や Karlsson, M. (2018) pp.44-53.

29 Radner, K. (2009) や Radner, K. (2012) を参照されたい。

30 Karlsson, M. (2018) を参照されたい。

31 Wasmuth, M. S. (2016) を参照されたい。

32 丸小野壮太 (2020)pp.105-106.

33 本稿では都市アッシュルのエジプト人アーカイブの現状と課題を示す。そのため、文献学による詳細な分析は別稿で扱う。

34 Pedersén, O. (1986) pp.125-129.

35 Wasmuth, M. (2021) p.37. “N31”は 20 世紀初頭の発掘、“N52B”は 1990 年の発掘の際に発見され、共に「私的家族文書」(private family archives) である。

36 Pedersén, O. (1986) は表の I から Ⅳまでの楔形文字文書を都市アッシュルのエジプト人アーカイブ (“N31”) としている。一方、本稿では Miglus, P. , Radner, K. and Stepniowski, F. M. (eds.) (2016) において新たに校訂された楔形文字文書 (“N52B”) も都市アッシュルのエジプト人アーカイブと定義する。なぜならば、“N31” と “N52B” の発見地の相違点には注意するべきであるが、都市アッシュルにおけるエジプト人の実態を明らかにするためには研究対象の楔形文字文書を増やすことが重要ではないか。これは Melanie Wasmuth 氏の研究課題 “Cross-regional Migration in the Ancient World : Egyptians In Assur” でも同様の見方・考え方で進められている。

37 筆者は 2024 年 8 月 12 日に大英博物館において非公開の都市アッシュルのエジプト人アーカイブに属する楔形文字文書 BM103956 を調査した。本調査に際しては大英博物館の Paul Collins 氏と日本女子大学の佐藤育子氏に感謝申し上げる。本文書は Fales, F.M. によって 1983 年に校訂されている。一方、以下の２点の疑問点があった。第一に、都市アッシュルのエジプト人アーカイブの数多くはイスタンブール考古学博物館、ペルガモン博物館、イラク国立博物館に所蔵されている。そこで、問い「本文書 1 点のみがなぜ大英博物館に所蔵されているのだろうか。」である。この問いに対して、大英博物館の Paul Collins 氏によれば、本文書は 20 世紀初頭にイギリスのコレクターが購入、その後、大英博物館に寄贈されたと判明した。総じて、本文書から都市アッシュルのエジプト人アーカイブが様々な博物館に所蔵されているという特色が明らかになった。第二に、Fales, F.M. の校訂では本文書におけるスタンプ印章図像が明らかになっていない。そこで、問い「本文書におけるスタンプ印章はどのような図像であるか。」である。この問いに対して、２種類の有翼日輪が描かれたスタンプ印章が押されていることが確認できた。総じて、本文書はアッシリア式またはエジプト式のスタンプ印章が押された法的文書であることが明らかになった。第二の考察は別稿に譲る。

38 アッシリア帝国の強制移住政策について Sano, K. (2020) を参照されたい。

39 Donbaz, V. and Parpola, S. (2001)p.XVI. , Faist, B. (2007) pp.128-129. , Radner, K. (2016) p.121.

40 具体的には 1 世代目：Mannu-kī-Aššur・2 世代目：Lā-turam-manni-Aššur・3 世代目：Huṭ-nahti・3 世代目：Puṭi-Mūnu である。

41 丸小野壮太 (2020)p.62.

42 新アッシリア時代の法的文書に関しては、Postgate, J.N. (1976)、Faist, B. (2019)、Faist, B. (2020) を参照されたい。

43 Karlsson, M. (2021)、Karlsson, M. (2022a)、Karlsson, M. (2023) を参照されたい。

44 Wasmuth, M.S. (2021)、Wasmuth, M.S.(2022)、Lindén, K. et al. (2024) を参照されたい。

45 Draper, C. (2014) pp.49-53.

46 Hoff, J. van’t. (2021) pp.53-61.

47 Fales, F.M. (2007) p.118.

48 Ponchia, S. (2012) pp.219-220.

49 Svärd, S. (2018) pp.119-120.

50 Faist, B. (2019) pp.269-270.

51 例えば、Baderschneider, S. (2021) pp.192-193.

52 エジプト人女性について Karlsson, M. (2022a) も同様の主張をしている。

53 例えば、2024 年度、ヘルシンキ大学で開催された第 69 回国際アッシリア学会 (69th Rencontre Assyriologique Internationale) プログラムを参照されたい。https://www.helsinki.fi/en/conferences/69th-rencontre-assyriologique-internationale (最終閲覧 2024 年 11 月 15 日)

54 山田重郎 (2024)p.34.

55 アッシリア帝国内の社会生活は Radner, K. (2017) を参照されたい。

56 アッシリア帝国におけるエスニック・グループやアイデンティティの問題は先行研究 Fales, F.M. (2013)、Fales, F.M. (2015)、Fales, F.M. (2017)、Yamada, S. (2022) を参照されたい。

57 例えば、Yamada, S. (2022) p.289.

58 Faist, B. (2007) p.126. 例えば、Faist, B. と Onasch, H.-U. はペルガモン博物館に所蔵される都市アッシュルのエジプト人アーカイブの校訂出版を目指している。一方、現在、未出版の状態であり、以下のように、Faist, B. (2019) p.270. には校訂出版を断念したと記されている。“For the texts discovered at the beginning of the twentieth century by the German mission under the direction of Walter Andrae see Faist 2007, 125–129. For the texts found in the year 1990 by a team from the University of Munich see preliminarily Radner 2000, 101. In Faist 2007, 1 and 126 I announced that Hans-Ulrich Onasch and myself were preparing a comprehensive study on the Egyptians at Assur, but we gave up this work because Raija Mattila was also dealing with the material.”

59 近年、アッシリア学では人文情報学研究が盛んである。例えば、丸小野壮太 (2020) や Jauhiainen, H. and Alstola, T. (2022) を参照されたい。ここで、丸小野壮太 (2020) における情報学の視点からの分析では筑波大学の大森雄基氏に協力していただいた。ここで感謝を記したい。なお、丸小野壮太 (2020) を大幅に加筆修正した原稿は Maruono, S. and Ohmori, Y. (forthcoming) "A Study on the Egyptian Archive in the City of Assur: Utilizing Personalized PageRank for Social Network Analysis" in Svärd, S. et.al (eds.) New Relational Approaches to Ancient Near Eastern Empires of the First Millennium BCE: Networks for Micro and Macro Perspectives on Identities, London. に掲載されることが決定している。

60 「王のアデー」に関しては Watanabe, K. (1987) を参照されたい。「アデー」(*adê*) に関連する楔形文字文書『エサルハドン王位継承誓約文書』に関しては渡辺和子 (2017) や渡辺和子 (2020) を参照されたい。同時に、Barcina, C. (2016) は『エサルハドン王位継承誓約文書』研究であるが、エジプト人アーカイブ (StAT 2 164, r.7) の言及が見られる。［Barcina, C. (2016) p.40.］ここで、「王のアデー」の解釈については東洋英和女学院大学の渡辺和子氏にご教授いただいた。感謝申し上げる。

61 都市アッシュルのエジプト人アーカイブ：StAT 2 164, r.7［Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) p.118.］に現れる。

【主な参考文献】

Baderschneider, S. (2021) *Die Tempel von Aššur und ihr Personal. Untersuchungen zu beruflichen und institutionellen Netzwerken in der altorientalischen Kultmetropole Aššur in neuassyrischer Zeit*, Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde an der Philosophischen Fakultät der Universität Heidelberg.

Barcina, C. (2016) "The display of Esarhaddon's succesion treaty at Kalhu as a means of internal political control", *Antiguo Oriente* 14, pp.11–52.

Donbaz, V. and Parpola, S. (2001) *Neo-Assyrian Legal Texts in Istanbul*, Studien zu den Assur-Texten 2 (StAT 2), Saarbücken.

Draper, C. (2014) *The Egyptian Diaspora in Assyria: A study of the cuneiform evidence, c.1074-612* BC*, University of Oxford M.Phil. Thesis, Oxford.

Draper, C. (2015) "Two Libyan Names in a Seventh Century Sale Document From Assur" *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 7/2, pp.1-15.

Faist, B. (2007) *Alltagstexte aus neuassyrischen Archiven und Bibliotheken der Stadt Assur,* Studien zu den Assur-texten 3 (StAT 3), Wiesbaden.

Faist, B. (2019) "Legal texts as a historical source: How to use and to deal with them" in: G. B. Lanfranchi, R. Mattila, R. Rollinger (eds.) *Writing Neo-Assyrian History. Sources, Problems, and Approaches*, State Archives of Assyria Studies 29, pp.261–273.

Faist, B. (2020) *Assyrische Rechtsprechung im 1. Jahrtausend v. Chr,* Münster.

Fales, F.M. (1983) "Studies on Neo-Assyrian Texts II: "Deeds and Documents" from the British Museum" *Zeitschrift für Assyriologie* 73/2, pp.232-254.

Fales, F.M. (2007)"Multilingualism on Multiple Media in the Neo-Assyrian Period: a Review of the Evidence" *State Archives of Assyria Bulletin* 16, pp.95-122.

Fales, F.M. (2013) "Ethnicity in the Assyrian Empire. A View from the Nisbe (I):Foreigners and "Special" Inner Communities", in: D. S. Vanderhooft and A. Winitzer (eds.) *Literature as Politics, Politics as Literature. Essays on the Ancient Near East in Honor of Peter Machinis*t, Winona Lake, pp.47-73.

Fales, F.M. (2015) "Ethnicity in the Assyrian Empire. A View from the Nisbe (II) : "Assyrians" ", in: M.G. Biga et al. (eds.) Homenaje a Mario Liverani , *ISIMU* 11-12, pp.183-204.

Fales, F.M. (2017) "Ethnicity in the Assyrian Empire. A View from the Nisbe (III) : "Arameans" and Related Tribalists " in Heffron et al. (eds.) *At the Dawn of History Ancient Near Eastern Studies in Honour of J. N. Postgate*, Winona Lake, pp.133-177.

Hoff, J. van't. (2021) *Egyptians Abroad: The Role of Egyptians in the socio-political landscape of Assyria during the Neo-Assyrian Period,* Leiden.

Huber, I. (2006) "Von Affenwärtern, Schlangenbeschwörern und Palastmanagern: Ägypter im Mesopotamien des ersten vorchristlichen Jahrtausends" in R. Rollinger and B. Truschnegg (eds.) *Altertum und Mittelmeerraum: Die antike Welt diesseits und jenseits der Levante. Festschrift für Peter W. Haider zum 60. Geburtstag* Stuttgart, pp.303-330.

Höflmayer, F. (2021) "Assyria in Egypt: How to Trace Defeat Ancient Egyptian Sources" in K. Streit, and M. Grohmann (eds.) *Culture of Defeat. Submission in Written Sources and the Archaeological Record. Proceedings of a Joint Seminar of the Hebrew University of Jerusalem and the University of Vienna, October 2017*, Piscataway, pp.189-227.

Jacobsen, Th. (1939) *Cuneiform Texts in the National Museum Copenhagen*, Leiden.

Jauhiainen, H. and Alstola, T. (2022) "A Social Network of the Prosopography of the Neo-Assyrian Empire" *Journal of open humanities data* 8, pp.1-8.

Karlsson, M. (2018) "Egypt and Kush in Neo Assyrian State Letters and Documents" *State Archives of Assyria Bulletin* 24, pp.37-61.

Karlsson, M. (2019) "Multiculturalism and the Neo-Assyrian Empire" *Res Antiquae* 16, pp.109-118.

Karlsson, M. (2021) "The Legal Case in StAT 2 173-174: Ethnic Conflict or Property Dispute? " *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 2021-3, pp.207-208.

Karlsson, M. (2022a)"Egyptian Women as Citizens of Assur" *Egitto e Vicino Oriente* 45, pp.185-191.

Karlsson, M. (2022b) *From the Nile to the Tigris: African Individuals*

and Groups in Texts from the Neo-Assyrian Empire, State Archives of Assyria Studies 31, Helsinki and Philadelphia.

Karlsson, M. (2023) "A unique example of an Egyptian-Semitic hybrid name" *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 2023-3, pp.149-150.

Karlsson, M. (2024) *From Memphis to Babylon: African Individuals and Groups in Texts from Chaldean and Achaemenid Babylonia*, Ägypten und Altes Testament 125, Münster.

Lindén, K. et al. (2024) "Social group identities and semantic domains in the ancient Near East" *Digital Scholarship in the Humanities* 39/3, pp.917–935.

Onasch, H.-U. (1994) *Die assyrischen Eroberungen Ägyptens*, Ägypten und Altes Testament 27,Wiesbaden.

Parpola S. and K. Watanabe (1988) *Neo-Assyrian Treaties and Loyalty Oaths*, State Archives of Assyria 2 (SAA 2), Helsinki.

Pedersén, O. (1986) *Archives and Libraries in the City of Assur,* II, Uppsala, pp.125-129.

Pedersén, O. and Troy, L. (1993) "Egyptians in Nineveh" *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 1993, p.39.

PNA = K. Radner and H.D. Baker (eds.) *The Prosopography of the Neo-Assyrian Empire*, I/1– III/2, Helsinki 1998-2011.

Ponchia, S. (2012) "Administrators and Administrated in Neo-Assyrian Times" Wilhelm, G. (ed.) *Organization, Representation, and Symbols of Power in the Ancient Near East Proceedings of the 54th Rencontre Assyriologique Internationale at Würzburg 20–25 Jul,* Pennsylvania, pp.213-224.

Postgate, J.N. (1976) *Fifty Neo-Assyrian Legal Documents,* London.

Radner, K. (2009)"The Assyrian King and His Scholars: The Syro-Anatolian and Egyptian School",

in Honour of Simo Parpola, M. Luukko, S. Svärd, and R. Mattila.(eds.) *Of God(s), Trees, Kings, and Scholars: Neo- Assyrian and Related Studies,* Studia Orientalia 106. Helsinki, pp.221-238.

Radner, K. (2012) "After Eltekeh: royal hostages from Egypt at the Assyrian court", in H.D. Baker, K. Kaniuth and A. Otto (eds.) *Stories of Long Ago: Festschrift für Michael D. Roaf* , Alter Orient und Altes Testament 397, Münster, pp.471-479.

Radner, K. (2016) "Die beiden neuassyrischen Privatarchive", in P. A. Miglus, K. Radner, and F. M. Stepniowski (eds.) *Ausgrabungen in Assur: Wohnquartiere in der Weststadt Teil I,* Wiesbaden, pp.79-139.

Radner, K. (2017) "Economy, Society, and Daily Life in the Neo Assyrian Period", in E. Frahm, A *Companion to Assyria*, Malden, pp.209-228.

Radner, K. (2023) "Reviews: Mattias Karlsson: From the Nile to the Tigris: African Individuals and Groups in Texts from the Neo-Assyrian Empire" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 86, pp.175-177.

Radner, K. and Squitieri, A. (eds.) (2024) Assur 2023: *Excavations and Other Research in the New Town (= Exploring Assur 1)*, Gladbeck.

Sano, K. (2016) "Die Eroberungen von Ägypten durch Asarhaddon und Aššurbanipal" *Ugarit Forschungen* 47, pp.251-263.

Sano, K. (2020) *Die Deportationspraxis in neuassyrischer Zeit*, Alter Orient und Altes Testament 466, Münster.

Spalinger, A. (1974a) "Ashurbanipal and Egypt: A Source Study" *Journal of the American Oriental Society* 94, pp.316-328.

Spalinger, A. (1974b) "Esarhaddon and Egypt: An Analysis of the First Invasion of Egypt" *Orientalia* 43, pp.295-326.

Svärd, S. (2018) "Women in Neo-Assyrian Temples" in Yamada, S. (ed.) *Neo-Assyrian Sources in Context : Thematic Studies on Texts, History, and Culture,* Helsinki, pp.117-133.

Watanabe, K. (1987) *Die ade-Vereidigung anlasslich der Thronfolgeregelung Asarhaddons*, Baghdader Mitteilungen Beiheft 3, Berlin.

Wasmuth, M.S. (2016) "Cross-Regional Mobility in ca. 700 BCE: The Case of Ass. 8642a / IstM A 1924 " *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 12, pp.89-112.

Wasmuth, M.S. (2021) "Das sogenannte Ägypter-Archiv von Assur (N31): Archäologische Bemerkungen zum Komplex N 31A+D" *Journal Advances in Ancient, Biblical, and Near Eastern Research* 1-2, pp.31-79.

Wasmuth, M.S. (2022) "A Stranger in the House: Situating Deviance in an 'Alterity' Research Approach" *An Interdisciplinary Journal of Life and Society in the Ancient Near East* 2022-1, pp.139-183.

Yamada, S. (2022) "To Be Assyrian Residents: A Reflection on the Integration of the Subjugated People into the Assyrian Empire" in J. Bach and S. Fink (eds.) *The King as a Nodal Point of Neo-Assyrian Identity,* Münster pp.273-297.

Zamazalová, S. (2011) "Before the Assyrian Conquest in 671 B.C.E.: Relations between Egypt, Kush and Assyria", in J. Mynářová (ed.), *Egypt and the Near East - the Crossroads: Proceedings of an International Conference on the Relations of Egypt and the Near East in the Bronze Age,* Prague, pp.297-328.

Zamazalová, S. (2015) "Egyptian in hieroglyphic script", *Nimrud: Materialities of Assyrian Knowledge Production,* The Nimrud Project at Oracc.org. (最終閲覧 2020 年 4 月 6 日)

[http://oracc.museum.upenn.edu/nimrud/ancientkalhu/thewritings/egyptian/]

菊池咲 (2022)「アッシリアにおける外国人の法的活動」『オリエント』64/2, pp.268-269.

佐藤育子・丸小野壮太 (2024)「歴史学と歴史教育の対話に基づいた開かれた古代地中海世界史研究の構築」ヘレニズム～イスラーム考古学研究会編『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』2023,pp.9-14.

丸小野壮太 (2020)『新アッシリア帝国とエジプト人―都市アッシュルにおけるエジプト人に関する考察―』筑波大学卒業論文 .

山田重郎 (2024)『アッシリア 人類最古の帝国』筑摩書房 .

渡辺和子 (2017)『エサルハドン王位継承誓約文書』楔形文字文書研究 1, リトン .

渡辺和子 (2020)「越境する粘土板文書と神―『エサルハドン王位継承誓約文書』における伝統と革新」久保田浩他編『越境する宗教史』,pp.493-528.